

「あるお檀家さんの話」

山口県 妙光寺 住職 山縣 洋典
みょうこうじ やまがた ようてん

私が住職を勤めるお寺では、お盆やお正月には多少遠くても直接訪問し、その家の仏壇でご家族と一緒に勤めをさせていただいております。

しかしここ数年は、新型コロナウイルスの流行により、訪問の際チャイムを鳴らしても反応がなく、また電話が通じなくなった家もあります。私は心配になり、お檀家さんの親類の方に連絡しました。すると「在宅はしているが、コロナウイルス感染防止のため、また防犯上からも、極力人と関わらないようにしている」という事でした。また、こんなこともあります。室内に外部の者が入ることに対して猜疑心が高まり、庭先など外でお経をあげることも多くなりました。

私は以前とは違うお檀家さんの対応から、新しい問題が生じていることを感じました。それは、お檀家さんの家の「室内状況」と関係があります。

以前、一人暮らしのお年寄りの家を訪れ仏間に入ったら、鼻を強く刺激する臭いにびっくりした事があります。原因は、ポリタンクの蓋がゆるんだ状態で倒れ、中の灯油が漏れていたからでした。私は慌てて窓を開け換気をし、お檀家さんに危険であることを話しました。しかし、お檀家さんは全く気がつかなかったと言われたので、県外に住んでいるご子息に連絡しました。実は、ご子息に機会がある時は、直接室内の様子もしっかり見て欲しい、変化があれば直ぐ連絡が欲しいと頼まれていたからです。お檀家さんは、数年前から体を動かす事が不自由になり、家の居間だけで生活している状況でした。私の連絡を聞いたご子息から、お母さんとの同居に踏み切ったとお礼と報告がありました。

危険を察知するような変化は稀ですが、以前に比べて家財道具や衣類が乱れている、またごみ等が捨てられていない等、ある種の注意信号だと思える場面に遭遇することは珍しくありません。自分では気がつかない心身の変化から、日常の変化が生じるのです。

歴代のお祖師様が伝えて下さったお示しに、「面授めんじゆ」という仏語があります。「対面して師に直接教えを受ける」という意味です。この「面授」の意味を、今日のお話のような例に当てはめて解釈すると、直接お互いが顔を合わせることは、言葉のやり取りだけではなく、動作や表情、雰囲気を感じることでも互いの心身の変化を感じ合ひ、最も良い対応策や解決策を考えていくことが大切だということになるのではないのでしょうか。私は「日々、人々が顔を合わせ、互いを気遣うような人間関係の構築が、今あらためて必要になった」と実感しています。

